近世説美少年錄 九編 三

へ13
3567
43

門 へ13
號 3567
卷 43

新局玉石童子訓巻之二十八

東都　曲亭主人口授編次

第五十八回　一炊の榮華健宗郡縣を受く　分兵の計畧正忠飛鳥を放つ

登時杜四郎成勝い杵臼入道趙心と。奇遇と感じて且いかう支の前ゟ知りが如壁言い御坊と已ゞの如し。彼信濃路を荀且ぶめらひしゝらひて今宵の再會と思へゝ最憑しくいと以べ通能も共ぶらかう我们他郷の旅客ゑれも縁あれあそ這君の資助ふるゝも奇ゝなぞや。義を見てせざるハ勇ゝ諸賢と倶ぶ一臂の力と儘さぞや以て慰められて趙心ハ魚丸と共伴ぶ歡悉て謝しゝかう主君い尚少年ゝれい左ゆも右ゆも諸君子の隨意計せゆう世と潛為ゝも我身い既ゆ佛門ゝ入りて許ゝゝの年と歴ゝるふ共ゆ軍陣ゆ立入りて殺戮を事と共

早稲田大学図書館
34.6.3
藏書

相應しかそ佛意ふ背ムヨヲ力ハ弥陀の本願ハ只諸君ヲ共合力と仰ぎまつるふそ
とゝ云わらん土圭の轔ろ音して當山ゆ撞出ス丑三の鐘聊音くゆ閑廂和尚ハ
衆人ふうち向ひて辭しての曰ク夜ハ大く深ろふ諸賢姑且休ひの見ろ如く當
山ハ四壁都て堅固ゆて石を雜へて築立されば敵と防ふ便あらん且今ハ麥の熟秋
ゆ芟採ろ新麥ヨヲ數百口の夫食ふ足るべしその他何ぞ羨ん必ろ心意
去めいそと最叮寧ふ慰めて卒とそろふ魚九とりそ立て共侶ふ奥ろ便室ふ
退ぞかば趙心法師ハ道人ろ前ふ出て在らせて寄隊の有無を知らせんそ
亦辭して退りけろ然れば成勝通能正忠正義李彦ろふも出足八東作押繪ハ
昨宵ろ不睡の疲労ろふ知らねば掘二郎と共侶ふ片隅ゆ退ぞ睡ろもろく
假寝の疲労ハ同ク次の間ろ壯佼ろふ至るまで借ても足らぬ宮枕肱さへ枕て
短夜の明るも知らで皆共侶ふ一要時熟睡をもちけ。かくてその詰朝鶴脛

奈我四郎見越松時ハ鴨脚短平と共侶ふ各宅眷を携て阿甦寺ふ尋ぬ。
又昨宵野蔬物の市場ろ宿所へそ別去りたる貝方の壯佼十餘名も各宅眷を
由縁ある隣郡他郷遣して且同志の毎幾十名狡俱して阿甦寺ふ集合ふけり。
然れば押繪ハその時ゆでも男子の中ふ只單打交りて在らるの相応しからぬ思ひ
ゆふ時ハと奈我四郎ゆ妻子と俱して來ろふ及びて寺僧ふ乞て小舍室を借
ろて其女房ゆとの共ふ起臥ゆろ程ふその詰朝正忠李彦成勝通能
望洋次世作ゆハ俱ふ防戦の准備を做ふ心利ろ二三人國の里の壯佼ふ鏑野
の館ゆ動靜を見て來よとそ遣しゆ又當郡の衆人ふ魚九出世ゆ貴ゆ顔末鏑野範
射軌的の弑逆の罪と數へ告文をヨヲく書ゆ母ゆ亦貝方の里人十數名ふ
吩咐て其告文を路傍ろ堂社の枉樹木の幹ゆふ貼せそきく忠義の志ある
良民を招しかば於是ゆめて舊主武茂ふ送腹ゆろ知る者皆歎ひく

疑ふ且年来軍的の貪りて飽くを非法に疲労し折れば皆義に仗らざる者も多く徴めざれども豪農富商の各魚丸の射方と倡て或い軍要金を調達し或い兵粮を贈るも少からず刈亦侠客力士田夫農民の壮なる者ども俗へ詣繰ぐ漸次に阿甦寺に走集る程に義旗を揚し始より僅に五六日にして軍兵三百四五十名に満ちぬ是により正忠季彦趙心は樅二郎八重作らと相謀て急に戎衣を買求め弓矢鉄棒何れとなく軍馬の備整へども軍的いかにせん先度の敗北懲りて狭尺門戸を閉橋を曳て敵と防ぐの備を敬ものを寄来つべきとは見えず郷西に遣りける間諜児のかへり来て告るにより揣雄の壮佼ども余らず急に推寄て攻撃さえも勇しく正忠制めていまだ飽さず知成勝季彦らに商量するに軍的既に我党の魚丸君と相佐けて富山に籠りと知らざるとはあるまじ今日にても推寄来ざるは必是故あるべしこの義と何と思ひ問

ふて成勝沈吟して開き已にも疑ひ思ひ然れども居て敵の寄るを俟ん兵粮の費に計るに者に似たり とぞ樅二郎もうち笑て膝を打て譚るやう在下熟々軍的の人となりを推量るに外剛くして内柔弱に譬べ鰕の甲あるも反て腸寡分に如し とぞ勇あるに似て實は勇なく智あるが如しも只邪智のみ然れども あれ先度に懲て寄来ざるのみにて今は魚丸の御為に義兵を起す時宜ゆゑ ゆゑ縁故と推時は単我身と救んと諸君子死力を盡されば明日の先鋒に人に譲らず我們兄妹押絵と共に三名にて そひぬれとなべ和田小十郎正義も我身とも必加らるべきと恐るゝ正忠に あへむ孩児開き過當の押絵少女の武勇ある汝の及所にあらず先鋒は兄妹三名にて足りぬとなべ樅二郎に備る八重作を見るに汝もよく思ひね正義腹子の投石の精妙明日の先鋒に加らるゝ暫ふべ

くもあらぐ。とぶ八重作然と忘て其ふ嘆唱あさりける。當下成勝ハ正忠ふ向ひて曰
ふ。驚思ふ令郎の投石ハ昔の紀平治ふ伯仲もとひべ。就て已疑ひあり。保元物
語ふ見れ。ハ郎為朝の従兵ふ三町礫の紀平治あり。然るを世俗ハ訛りて八町礫
とふ者ヨヌり彼紀平治の投石の精妙よく三町を徹をとも八町ハ甚しかるぞ。先
生必考あらんゆまくりくいとへべ通能も共ふのゆう。その義ハ已も豫より疑思ふ
所ゑ。先生必明辨あるべ。いそくと請問ハ正忠ゆ黙頭て不言唱ゆゑ始より
考ふるふあらねど。三町礫と謬て八町礫とふ者ハ素是雑劇の扮撰ゆれども
世俗ハ保元物語ふ三町礫とあるを知らで只見る所の雑劇ふよりて八町礫と覚ゆ
ゆの故ふ近来の物の本ふ故意ハ町礫と写たるあり。世俗の覚易ふ為ハ今と
ども後の物の本ふハ町と唱るハ昔の紀平治ゆらぎるよりと。諦を作者の用心ゆて
訛るとのゆ事ふ害なし。且ハ偶数の終ハ八の下ふ十あれども十ハ一ふ通ふとゆて。

八と大数と生。壁言ゆハ雲八重垣の如し。然れば彼紀平治ゆ投石ハ技藝の極ゆれば
訛りと知りて訛りふ従ふ友て作者の深意あり是を扮撰とふべ。ゆ開て穿鑿て
云云と論る者ハ金弧玉絃假とゆて真と偽せるゆ作者の本意ふ違ゆべ。と言詳ふ
説諭せば成勝通能いへさらく衆皆好と相稱て俱ふ感佩ゆ。浩嘆ふ時ハ
奈我四郎ハ外面よりかへの麦。樅二郎ゆふ報るゆ。方僅三門の邊ゆ一箇の檻愁
児と生拘ふ死撻徴しゆ責問ふ他ハ郡司の間諜児ゆ彼錦ゆるゆ知るふ足る意
外の新奇も是ヨヌるふの庭上ふ牽よせてみづゆ。ゆ世俗ハ相教ひて
開ゆ料らざる幸ひゆ疾々とハそゆ世ば時ハと奈我四郎ハ応ゆ共倡ふ又外面ハ退り
ける。當下韓錦樅二郎ハ正忠心正義季彦趙心成勝通能ハ重作と共ふ端近く找
出て件の生拘児と俟程ふ姑且て時ハと奈我四郎ハ生拘ゆる敵の間諜児を一
箇の小力士ふ牽せ来て檐廊の下ふ推居て杖て抗て生拘の背ゆ四撻悩しゆ。ゆれ

檻丞児郡司の館の吉文の趣漏を隈なく糺えよ旦夜でもいなぞや。いなぞや。只管ふ捷
懲せども。生拘児ハ苦痛を忍て。なべくもあらざりーと趙心法師ハ呵責と制め膝と
找めて生拘児ふ向ひて却ふ。汝ハ何ぞ。その男子正可ふ聴ね魚九君上ふ。汝
速ふ首伏せ。命乞ひ。汝ハ我と認ぎとも。大刀自母子ハ知りてぞあらん。
我ハ則部領の旧臣杵臼七郎程栄。八道趙心是と鏑野範射範的母子ハ共ふ我
逆の賊臣ふ。罪饒ぎ者ふ。ねども。汝ハ旧怨もふ。魚九君の御為ふ那里ふ容子と
告げ禀さば。毒物変じて薬餌ふ做る其功ふ。せ然ら目今露の命と助けら
るべきぞ。必恩賞あるべき。ぞ。慧さぞ禀せりふぞやと。問れて件の生拘児ハ嗟嘆ふ堪
ず陳じ。原来聖僧ハ昨今人倩ふ。その名安ぞ。杵臼王ぞ。ありけるよ小可ハ数
ふも足ら。鏑野殿の御内人名ハ如此ぞと。吸做さる。侍品ぞ。ハ当所の容子と見て
まわれぞ。秘密使と命せられ形貌と窶し。覘ひよりて。御射方の雑兵ふ紛入らまく

欲せ。ふ命運全かるぞ。今ぞの田地ふ至る上ハ。何と。吹歴禀ぞ。徐ふ。ぞ召れよぞ。
鏑野の館の光景有つる吉文の趣と。具ふ招伏ぞ。話分西頭ふ程ふ曽根見伍
六郎健宗ハ。曩ふ奈良櫻八重作。灵力の押絵ぞ鏑野の館ぞ吉文ありーわ大江峰
張主僕と共ふ。獄卒ぞ。と殺散。ぞ。獄舎と破り。韓錦と。救出ら王舞と。ち踰て
出る程ふ。健宗ハ。驚怕れて。獄舎の隅ふ。躯て。存り。既ふ。ぞ八重作。ぞ。ハ。縦二郎と。伴ぞ
外面ふ。脱去りー。時ぞ。獄舎同ぞ。かられば。健宗ハ。后ふ。跟て。出ぞ。もあらざりぞふ。押絵
ぞ。彼圓柱ぞ。と。ぞ。隣の牢ぞ。破りー。ぞ。その。廓音ぞ。間ぞ。格子ぞ。も。共ふ。甘ぞ。て。料らぞ。便を
ふ。ぞ。れ。ハ。健宗ハ。力ふ。信ぞ。て。件の格子ぞ。推開ら。身ぞ。斜ふ。ぞ。縦二郎の出る。獄舎の
破れる。潜出て。四下ぞ。見る。ふ。死活ハ。知らぞ。血ふ。塗れて。仆れ。獄卒二三名ぞ。あり。ぞ。も。奇
貨と。合ぞ。天。開ぞ。中ぞ。衣物ぞ。冒ぞ。を。剥。合ぞ。迷ぞ。る。双ぞ。漏ぞ。と。ぞ。る。鞋ふ。斂め。腰ふ
帯て。脱去らまく。欲せ。ふ。外面ふ。緝捕の衆兵。縦二郎ぞ。と。捕。籠て。挑戦ふ。聲

れば健宗い驚き怕れて今さらに塀を乗て脱去るべくもあらず人もまたあるとそ儘に剥
令りし彼衣をとり奪り身装をして却那里より脱去らんと思難き黄昏時薄
暗に紛れて憶ふもたの館の書院の庭の頭に来りけると見れば庭門の戸折
戸いまだ鎖さずありければ胆大くも桟入りて樹柱の蔭に立潜びつ肚裏に思ふ
我今茲を逃去るとも銭一文の盤纏なければ復た乞食に倣らんのみ今官奥まで潜
入りて些の盤纏をもとめんとそ脱去りたる甲斐あれ嗚呼小人と不敵の本性猶も
便宜を覘ふ程に這頭に守人もなく日い暮果て奥の方に狼籍児と逃去るとも
いふ聲幽に聴えければ健宗い驚きて素破我上狄と裏く胸を推鎮めつゝ又
聴くに狼籍児とは三つ獄舎を破りし彼男女樅二郎等なるを早くも悟りて弥
噪ぐを屢四下を見入るに樹蔭を出て書院より奥の方に潜入る者もあら
ざれば扨こそよけれと両三間踰て出居の方まで来つ是より先い後堂なる人音間

近く聴ゆるに却那里に狄隠居て小夜の深るを俟て狄と思難く身を平喜の
壁に附て物蔭に求めて一霎時立在け小程に鏑野郡司範的と思ふも似ず八
重作押絵の死力を尽せり大刀風に敢敵もなく剰両個の助剣あり樅二
郎を奪合るに共に外面に逃去りし鍼持隈八鬼丸剣等二人も透さず伏兵を駈
立て東西より彌に龍る後門前に戦ふ程に賊徒に加勢の衆兵あり洪波の如く推
寄せて其戦を援しかば苛三隈八猛しとも左右に勝を攬ちかつて勝負い
いまだ知られぬとは汪進櫛の歯を挽像く言詳に宥えつゝ軍的是に胸を潜して
母親大刀自に告げ知らせ我等韓錦奴を殺さんの悔るとうんに副語ふに蟻の塔
より隄陪崩る今に来て倘彼奴を捕逃さば世の胡慮ふるゝ而已遠に加勢の
兵を出遣るに来るとも甲も自ら乙も自ら最も劇く下知あるも左右に胸に休
つぬ起て見居て見軍間を掌鳴らし聲高やかに連りに近習を喚立れども恩

劇毒折れば絶て答る者もなく的に焦燥てかくこ折れ内外の守りを緊要なるに次の間に誰も居ぬ最烏滸と呟て親吊燭を引提へ猶も近習と唱へ次の間の方に出る程に出居の壁に身を潜めたる健宗を見出して迭に驚く主客の勢盗見入る誰狭あり兵毎まあれと呼せも果ぬ健宗は一期の浮沈と心慌て腰なる刀を抜なも見せぬ軍的の引提燈砕落てかくも刀に膳と柄も徹れと偶然と刺さ刺れて軍的苦となる身を仰反て什る処を無し撫る胸前を又一刀刺あらば三魂蚤く天に復り六魄既に地に落て黄泉に旅客になりけり軍的今憶なく外従母弟なる曽根見健宗の為に刺れて枉死と致せは是併其父軍射の抵逆の餘殃なる天の元さに所なるべしと世の人後に評けり間話休題當下宵勤の近習なれ件の物响なる敢馬にて指燭と兼ねて次の間より走来る者両三名なる光景に胆を潰して舞足の踏所を知

らぬ原来檻怒児逃さると異口同音に呼ばりて共に刀を抜閃して推稠龍て駆るを競へ健宗竟に脱る路なく血刀とりて受流し右に中り左に拄て命を涯に戦ふ告處に奥の方より突然と出来る者あり是則別人なる軍的の母大刀自右に一條の獨眉刀を抜て奥隷の老黨なりける牝鳴番太守實に燈燭を兼せ先に立つ其の他有司三四名と前後左右に従へて目今戦に此彼の刃に憚る色もなく間近く立て彼制めんと下知されば有司等早く聲を被て自他の人々闘戦と休よ御前の御意なるぞ其檻怒児も兼れ共に刃と敵めぬやと唱へ刀の鞘を間へ衝入れて推隔へ禁れば近ヨリ必ちに公もはらへ健宗も訝りて思ふに今七必死を饒さる婦人の仁欣然もなる由断させて捌捕る便直なる欲と疑ひの霧なられる五月雨の雲霽ぬ思ひとなれ品とも碎く勢ひの俱に折けて阿容々々と卒とぞ共侶に又解ける身を退けて开る儘左右に跪居る當下大刀自を

一箇の有司に持せる。発児は尻とうち樵て衆人に向ひて云ふ。驚思ふ範的の横死状
蚤く閥閲怕れて我に告げる婢毎あれいち驚ろつ其檻松児を蚤く捕捕せんと。打
から身邊に付くる守實并に有司等と従つ走りて見れば我児に範的と書したる其檻
松児は翌日我も外ちら認りたる彼を児他実の健宗とそ。弟ひれも照据なけ
れば開き儘獄舎に入置しに今日も樅二郎と共伯に獄舎を破り脱出そ這頭に紛入
なる人範的と深く怨みて敷果さん為る欲開き左れ右もあれ曩に近江の觀音寺
へ遣したる両公固の脚力稲妻歯四郎飛鳥疾四郎が今日晡時の比入り来て反命表
るふよう我姪密甘の贈来したる固輪と併見るに他が弟伍六郎健宗の相貌に似も
ぬつ身長殼耳音痘瘡の迹まで最も備に注しくり是ふとりてあれと觀れば那児
ちそ我猶子なる曾根見伍六郎健宗そ初名と竊に人を欺て我館に這留なる
健宗に雪太と換喚做したる悪僕なり と積悟して後悔膾を噬るに折ら

範的に出で公因聽に在りけれバ早ぐ報るに及ざりしに猛可に樅二郎の事起りそ内外
打擇きて故に健宗と獄舎より饒し出しもせざりしに殺伐かの如くなる意外の凶
変言語問断非如我猶子なれバそ一郡の主と害したる罪に千曳の石より重き千番
大赦の日にあるも赦されざる罪人なれども亦よく思へば是を赦して用ふべきなれば
茲に有司近習等に告らく這秘事に守實もいまだ知らざるあらむ健宗も正
可に聽れ昔我身少きしに時範射主の妻に有身ざりしに年
齢三十に餘りし時創て孕妊あり女の子そ産るも死胎であり所れ労して
功多く最惜しき。その比範射主の嬖妾に嘗児と喚做したるも我身と同月に有身りそ
又同日に産の級を解いて分娩きしに男児なれども殊さらの難産そ母に當坐に月故
に生れし御児に差ふと早くも告る者あり所れば妬とうもあらぬ悄地に其子を執
易て我生し児とうひ做さば夫婦の中も堅固そ後々までも安らふと思慮に腹心

る女房ふたりうるさを穏彼女ゆも黄白ヨヽく取らせてその児を入易さをて当鳥児の生た
ゆ〻ふ女の児を母も子も当坐ふ身故り出たとらせ〻かび我伏ふ旨く欺れて升を惜むを
つるゝ嬉妻腹るゝ男児を母さを志あるとうれが是ふ増る妻ふある智を〻く
と大悦びて五日百日の壽祝も美く盃さをとふ者るゝ当るの珠挿頭の花と愛慈を
のさを実を推せが妾腹を我骨肉ふあらねども我児を思へば憎うもあらず其児を無病壮
健を稍成長り比範射世を去りゆひてゝ親の跡求衣を業興て二世の郡司ふ倣りふ
たる鏑野範的即是を然れども範的の心術母ふ孝ある者ふあるを只色ふ耽り酒ふ
溺れて人の誡を思はざる白物るゝを爭何ひせん彼身今横死を興ふた児子あるを
ゝ一芸の故ふ我猶子伍六健宗を養を当家の家督ふ倣をとそれ疎を棄て親
ふを執る骨肉家の柱ふあらんが我安身の室とやらまゝ衆皆をの我を存せよと最厳ふ
言ふせが守寶有司近習ゝ敬焉感ふ額を衝て唯々とだるふ一言半句も不敢を

敢ふ者るゝ御女儀ふ稀るゝ御計ひ左も右も仰の随意来りひゝ噫芽出を
稱ける弁ゞ中ふ健宗ふ窃泥喜樂地を易る不測の僥倖ふ満面笑れて大刀自を伏
拝ゝ答るゝ小生獄舎を破らるゝも彼韓錦の當悪の狼藉ふゝ料らるゝ出入自
由ふるゝ〻かびいを直訴をせやを思ひて茲生を推参をけるふ範的を撞見ゝく心
慌ふ意外の殺伐あるゝ罪を釀せふ小母君の大慈大悲ふ菩薩ふ優を洪恩
徳量我身の罪を饒されて當家の養嗣ふ倣されるゝ養母君ふ孝を盡ゝ家を
脩め民を拊て地を増境を啓くべゝ猶御慈愛を願ふとゝ然ゝも雄々ゝき拵言
言ふ大刀自ゝら領を介ゝ近習母健宗を奥ふ案内を沐浴ふ及を衣
裳も疾更やを〻今日ゝ主君を敬ふべ又有司ゝ外ふ出て苛三隈ゝ紙
召返ゝ送るゝの上を告知ふ彼韓錦の當悪の我々自来逆を倣をそもヨ寡
知れる烏合の奴ゝ今日皆搦捕ふを爲ゝ健宗ふゝ打向ゝ朝日ふ霜の鮮るゝ像

立地ふ誅伏せん又守実へ有司ら兵ふ軍的の亡殿とら脩め安莽の准備とを
ゾれ勿論外様の兵毎ふれ軍的猛可ふ乱心ふ故ふ自殺ふ当家の親
族伍六郎健宗主と家督ふ立ゆ為ゾ孰扶不の字とふ者あらんや這館ふ
も知ふ白猪の城の内ふ籠ゾ郭の四門の出入を禁め卒とふ身を起して
一箇の近習と従て脱て後堂を退り出ふ程ふ鬼薊苛三鐵持隈八等計多の伏
兵を従て這時館の門前ふ在り韓錦の党ふ戰負て敗ふ防難ふ有りけふ
大刀自の下知と急ふ召ふ有ゾ雑兵二三十名と折れ辛く門内ふ逃入りふ
敵ふ開ゾ儘退ゾ攻撃ん事せざりゾ脱て大刀自ふ見参ふ事の敗ふ成ふ
軍的の暴ふ死ふ有ゾ并ふ大刀自の猶子曽根見伍六健宗と養嗣ふ
人ふ後ふ成ゾ知ふ呆れて口を鉗むふ勢かくの如ゾ成ゾ只阿容々と兼服して健
宗と主と敬ひ支皆彼意ふ依ゾ有ゾ其次の日の早旦ふ老黨有司ら評

議して封門ふ士庶人ふ軍的の死去健宗ふ家督ふ立ゆ為ゾ徇知らして更ふ税斂と重
ふ法度と出ふ者幾十條ふ後軍的の門葬と執行ふ程ふ部領魚兄ふ支
稍ふ成ふ彼黨の告文を呈閲ふ者あり健宗則其告文と大刀自ふ見せて
意見と問ふ大刀自もうち驚ゾ現然者あり昔武茂主の壁女妾ふ垣衣と
嘆ふ成ふ他既ふ有身ふ帯ふ程ふ成ふ我伎ふ是と憤慨恩ゾ早
く彼奴と結果して後安くせばやとそ内を覗ひ見ふ垣衣の兄ふ杵三程栄其機
を猜して垣衣と俱して逐電ふ往方も知らざりゾ追捕徒ふ日と過して索
絲ふ成ふ残燼二ゾ燃ふ成ふ韓錦の反賊ふ彼遺腹子と執立て假ふ義
兵と唱ふ富郡の民欺れて走集ふ者多ゾ成ゾ軍兵を
催促して賊徒ふ勢の猶以間ふ對治せざるべふ今ふ猶豫ふ成ふ敦固
悍く言ふ成ゾ健宗ふ驚ゾ応と為ふ退ゾ有司ら下知ふ夜ふ日ふ分

む軍兵を催促すーかりければ近郷の荘客名代舊主と慕ーく思ふもあれども勝負と未然ふ料難て其催促ふ従ふ者一千餘名ふ及びけるは是ふより健宗ハ大力自と商量を。苛三隈八ふ上吉と示ー郷高ふ近江へ脚力を課て観音寺へ遣ーける両箇の走卒稲妻歯四郎飛鳥嵯四郎の功を誉させて共ふ侍品ふ推升ー猶亦秘密使と是と歯四郎疾四郎ハ阿甦寺ふ潜ませて賊徒の虚実と見て来よとふ健宗密意と美て共ふ形貌と窶ゝ紛入らまく欲ふーふ敵ふ毫も由断さけれ疾四郎三門前ふて見越松時八名ふ生拘ふ衆義士の目前ふ牽居られて鞫問既ふーかりけれ疾四郎ハ秘ふ由なく鎬野の館の凶変と一事も漏さず首伏ふ是ふより正忠成勝以下の義士名ハ郡司軍的の横死及曾根見伍六健宗と養嗣ふせられ一支まで言詳ふ知ゝて駭嘆せざと云者ゝ時八名ゝ敵の虚実を少知ることを以ーかば軍神の血祭ふ早く這疾四郎の首と刎ゆとも只管ふ薩ーか

ども正忠敢是を允さず人各其主の為ふ他命ゝも惜ーて敵中ふ入らまゝけるハ忠ゝ義ゝ之ゝ我仇ゝと是と殺ゝ忠義の方と断ゝらざるべし。彦黙頭て和田主の意見宜ふ故ゝ世ふ碁象棋を嗜む者高ゝハ敵の棋子を獲て。敵と攻る故ふ必勝ゝと云ーて。沙ゝハ不らざ偶敵の棋子と獲て是と已ゝ有とて使ふ方と知らざ是ゝ摠敗事ふ至るまゝ握殺ーて竟ふ益ゝ因て思ふ這疾四郎ハ敵の棋子と今是を獲て使ふとゝ必我資ふ為ゝ握殺ーとかゝと云ふと縦二郎ゝ少て両箇の教諭感服せ。然ゝ他と檻ふ龍て異日の用と俟べ交換と問ふと正忠ゝ少て然ゝ然ゝ時八名ゝ頂けあらまゝ異日の用ふ充へゝと諭せば成勝然ゝと応て敵の虚實を知る上ハ明日の夙ゝ推寄て攻一攻彼強弱と試ゝあべゝ。とゝ通能も俱ふ少ゝ那里の素ふより土城ゝ塀固ゝらば斬殺ゝる日韓錦と殺ゝ共ふ脱去ーゝ那容害ハ知ゝ義ゝ攻るふかゝゝゝらゝ。慌ゝ成

勝椎禁そ約莫這回の軍配い和田王ふ任用して彼進退ふ依るらそとけれとらくぎ
季子彦も共ふ仏ゆう先ふまる時ハ人名征一後る時ハ征せらる居て敵と俟るらぐ鉦
鼓不断の選佛場を俗羅の巷ふ做さんのミ山ニ我黨の本意るるんやそも和田王の
意哀ふあらんとらくと正忠うちはそ諸賢の意見愚意ふ稱へる先間諜兒とそ
猶ふ敵の容害を拷らそ後ふ推寄てん我憤ふふ敵ハ一千餘の精兵あり我義兵ち
二三百ふ過ぎ寡とそ衆ふ敵まる事ハ伏兵ふあくるのるー這里ふ那里ふ赴く中途ふ
便宜の茂林ふあるぎ事ふ向へ八重作柱を生て是ふ那館ふ赴くふ路程十八九町ふ
ある大樹と喚做ーなる小松原の左右ふ小山あり松柏ヨヲく生茂れり伏兵を用ふ使
冥ふ去そあらむぎらんとハ正忠含笑て小らん事城攻ふ野戰ふ利いあらむぎらんとハ
ち趙心法師ふうち向ひてれ坊も既ふ汝まて如く今日の評議と魚丸君ふ云上の給
かーとらふ趙心異議もるくとあるらんハ汝ぐ如ハ範射範的俱ふその死然ふ得ぎ

父ハ召仕男童殺されて子ハ亦従母弟ふ刺れて天網恢々疎ふまて漏さぎ皆誅
義士ふ向ひて謝ーとふ諸賢評議の條々ハ我次の間ふ在りて伺ふる我身の
不幸を顧れば世ふ立べくもあらざりーふ料ら諸賢の資助を以て久後ぎ憑ーた
歎び是ふ優ま者ぞ。とハ閑廂和尚も共ふ涙ぐう魚丸の実母周晋比丘尼の上ふ就
て告べた由の事ふあらねど憚りあれば後ふ云そ云の義士
ら額衝兼て去の日軍議ハ果ふけり徒而その夜分ふ五月雨の餘波ぞ。大雨
連りふ降沃ぐ二四日霽間をりーかば義士ぞ陣の准備整ひるぐ。ぞろ
む雲齊間を俟て徒ふ日を過ーけり既ふ六月の初旬ふるりーかば雨霽て溽暑弥
増ま隨ふ義士ぞ都て甲冑を用ひぎ、勒肚ふ甲を脛衣して部領の館を攻ぐ

もかう折ら時八ゐ慌ゐる面色して正忠ゐ向ふ告ゐ預げられる生拘児孤鳥疾四郎八日夜人と隷在らせて外ふ出ることと饒さぐりふ昨宵此の隙やゐけん逃去りて あゑふ氣開きて己ゐ怨ゐるとハゐ已ゐとゐられば生きゐるふとゐと云正忠是をうち聞て然ゐあゐあゐうち捨閣ふ他既ふ逃去りてゐ我計成ぬべしとゐと成勝訝りて悄地ふ所以と詔れば正忠笑て聲を低めて君が才のてすぐ恐らむ欲ゐる所ゐ敵の兵を分ちて輒く破ん為のみ疾四郎既ふ逃かりて我軍議を聞ゐる隨ふ彼伏兵のゐをしも健宗ふ告知らせゐば健宗ゐて期ふ臨ゐて兵を分ちて我伏兵を撃ち果さまく欲ゐるゐん分るとゐふ唾して健宗と擒ふまべし正義と奈良櫻ゐ各三千箇の雜兵と將て彼犬戴ゐる茂林ふ埋伏して敵撃ゐ蒐ゐば逃走りて遠く是を誘引べし又押繪少女八五十箇の雜兵を將て彼茂林の那方ゐる水田の中ふ下立て田の草を拔く賤婦ふ打扮て敵を欺いて健宗敗走る時遮て是を撃ば必しも功あゐん其餘八又如此々々と隊配り既ふ定りければ衆皆異議ゐる者もゐ開ゐ中ふ小十郎正義と八重作次世喜いむ共ふ正忠ふ向てゐゐ非如詭計ゐるも敵を見て逃走らんとハ勇士の恥ゐる所八已ゐ先鋒とゐ七望まくゐゐと舜ふて正忠ゐ左右ふうち掉て開ゐ亦自由の至りと約莫今番の闘戦ゐ韓錦を救ふの故ふ追隊と防ぐ為のみゐ當郡舊主の孤児を相憐むの故ふゐて善ふ與して悪を討義兵の二字と云れ狡然れば偽て逃るとも始終の勝ゐを全功ゐと云云とゐるハ只名聞を思ふ似ゐる最烏滸と窺れば正義と八重作ゐ言の道理ふ羨服して又ゐようもゐりけゐ低而正義八重作押繪ゐ八其夜丑三の比及ふ腰兵粮の准備ゐ各隊兵を従へて大樹と投て出ゐくゐけゐ夏の夜ゐれば短くて幾程もゐく明初て既ふ朝日旨外る時候和田十郎正忠八杜四郎成勝と共倡ふ隊兵二百四五十名と將て馬上優ふ進發ゐ中ふ防守筑四郎季彦と杵臼程栄入道趙心八魚丸と守護の為老

兵四五十名を禁在せて、其が儘阿甦寺に在り。その朝、魚丸は李彦趙忠と相俱に則躬方の出陣を示しまをで送りける。案下某生室説、小程に曾根見伍六郎健宗は小母大刀自の制度として、猛可に郡司に推挙されて、随意ならぬことの者多けれど、患る所は韓錦の徒の故の郡領武茂の孤児なる和達魚丸を執立て、阿甦寺に籠ぬと、ゆえなくを征伐の為に軍兵を多く駈集め、亦銭持隈八鬼、剃苛三に課て兵法武芸熟に勝れ、浮浪人を招かれも多く甲斐越後の浮浪人武者修行の為遊歴して、近郷に在ること、ゆえなく竹木虎狼二牛鬼黒九郎、蛇塚真武四郎、和十六、牡丹五館、牛也刀、齋端高を、唆嗾して、賽猛者なる、皆十八般の武芸を克まとそ、共に需に應じ、禄に感じ、健宗に仕へける。是より先に、健宗は敵の虚実を知らまく欲して、稲妻歯四郎、九鳥疾四郎を阿甦寺の方に遣はしぬ。それより三三日に、歯四郎一人、固かりき。知健宗に報るやう、臣ら疾四郎と共に伍に形貌を窶して、潜寄て彼山院に紛入らまく欲ぶ。敵に毫も由断なくば、猶も潜て在り。一程鈍や九鳥疾四郎は敵の為に見出されて、搦捕れぬ。その式を告げまらんとて走りかゝりぬ。それを安からぬものに思へる疾四郎賊徒の呵責に堪ぬ、這方の虚実を口走らば、征伐軽かるべくも、疾推寄て踏潰えぬと、敦囲悍く罵りて、苛三隈八ら下知ありて、出陣の准備とのそぐ程に其、曛昏より雨降て三四日、需齊間ありしが、思へども五月を過して、天霽て暑熱弥増隨に明日出陣と定めるその宵、九鳥疾四郎は阿甦寺より逃かゝて、健宗に報るやう、臣ら幸あらぬ。賊徒の為に搦捕れ、彼頭人ら、の囚坐せる客殿近く、牽居られて、料らぬも彼営裏の軍議を送り、少ら開き、固様々々、如此々々ふひとそ和田正忠の謀る所野軍を利ありとして、大樹の茂林に伏兵を在らまそ敵陣を敗んとの、その綜の趣を具に告て、又の日、今阿甦寺に集合の賊徒は、百餘名に過ぎ、開が頭人は八九名在り。和田十郎正忠と大江杜四郎成勝と軍師と

疾四郎脱還
て敵の計
策を密告を

ごにん
ぶんえん五
ごろ九郎
やろくろう
ごに郎
ごろう二
ごに郎

たなかの
ごろ八
ごろう三

もこの他に張栄六郎通能和田小十郎正義韓錦樅三郎茂洋奈良櫻八重作次世其外弟三郎の押繪も在り又見越松時八鶴脛奈我四郎鴨脚短平等と喚做一たる小力士あれども皆是二の町三の町なれば数ふべくもいらず又両笛の老武者在り防守筑四郎季彦杵目入道趙心是と共に魚尤の傳を只米銭を嘗る而已臣も既に檜かせられて頭顱を刎らるべきに法師们の憐愍て命を生ふまた光兵も預けられて一旦三百と過き程に昨宵聊隙を窺て脱去りぬと真語虚談うち雑て支の術よく演説も健宗是とうち交て原来杜四郎栄六等を那隊に有りけるに他も近江に在り一時我兄の寃家なれば必首を斬梟て怨を雪んと遠くべきに公ろあるべきに我齒四郎と疾四郎に課て敵地に遣はし齒郎は那里より必ず来るべきに功を一又疾四郎は賊徒の為に捕れて反て功あり黒日賞禄いとふに依て既に賊徒の計策を少知る上に我も亦隊兵を分て其伏兵を駈出させて賊徒の勝を拉ぎ飯に然て賊て苛三隈八新参の兵毎に皆悉召集合て明日の隊配を定るに鬼薊苛三を先鋒の頭人にして蛇塚真武四郎和十六牡丹五を副とし又竹木虎狼二牛鬼黒九郎八各雑兵三百名を招て犬槙の茂林なる敵の伏兵を駈出て敵を捕べし其時賊徒は噪乱に我先鋒の頭人も其機を揃て逃るを敵べば全勝全功疑なし孰も明日の闘戦は彼杜四郎と栄六と敵る捕者は第一番の大功とぶべし其餘の備は如此なるべ詰内也力斎を後陣に在らせて飛鳥疾四郎稲妻歯四郎と副とも又健宗は鐵持隈八を従て本陣に将るべしなの他牝嶋番人に有司等と共に母御前に従ふ鎬野の館に留守をべしと既に隊分を定やらば健宗に相従ふ軍兵一十三百餘名其詰朝辰の左側に先陣後陣陸続として阿難寺を投て進發を有斯程に折もよく和田大江の義兵二三百名寃讐合せ如く両軍大槙の茂林邊ゆく

あいちゅう上を
間近く寄あつまり。義兵を統ふ二三百名是と健宗の千三百名か比ぶるに。三分一ふ
たらぬれとも智勇の豪傑なりもあるけれ。教ゑとして毫も乱を両軍闘聲を
揚箭を射出て既ふ鎗を交ふくも朝風ふ翻飜る両軍の旗のゆい東ふ靡
西ふ流れて勇ましかりしと云者なり。是併荘子ふ見える蝸牛の角の上ふありと云
蛮觸二國の闘戦ふ異ならぬ又小迫合を識ふ足らぬと思ふもあらんを又克思
で其死を争ふ一進一退同一致を大國小郡忠不忠勇怯好拙ふ上せぬ十室
邑ふ忠信あり。何ぞ其地の小大を論ぜん。後人歌あり。ゆえ證とも。

あらそひ治まる世乃かさつぶり。角ゆもとらせ両國の揺。

畢竟魚丸の義兵と大刀自健宗の逆黨と茲ふたゝび鋒を交るよの日
の勝負甚麽ぞや。其を又巻を更ゆ。且下回ふ解分るを聴ふかし。

新局玉石童子訓巻之二十八終